

“半日本人”から“ほぼ日本人”へー東大での21年ー

山本 祐 靖 (物理学教室)



1950年4月東大理Iに入学したが、その年の8月に一年の予定でアメリカ、マサチューセッツ州のAndoverにあるPhillips Academy高校に留学した時に、これがそれから20年の滞米生活につながるとは夢にも思っていなかった。また、その後中退した東大で21年も研究、教育に携わるなど、考えたこともなかった。まったく人生とは面白いものだ。

1951年にPhillips Academyを卒業し、Yale大学に入学し、そのまま大学院に残り、PhDの学位をとったのは1959年であった。多分1958年に東大在学期間満期となり退学したのではないかと思う。1959年からBrookhaven National Laboratoryに6年間勤務したが、その時当時、東大理学部物理学科教授の西川哲治先生（現理科大学長）も加速器部門に2年間勤務しておられ、知り合いになった。また当時Illinois大学教授だった西島和彦先生（前理学部長）も夏に客員として

来られたこともあった。そんなこともあってか1965年にMassachusetts大学(UMASS)へ移ったあと、1967年の夏に家族と一時帰国をした時には、しばらく西川先生の客員として1号館に部屋を頂き、大学院の特別講義をしたりした。このようなことがきっかけとなったのかもしれないが、1968年ごろに西川先生から東大に来て泡箱写真解析の研究室を作らないか、というお誘いがあった。当時は日本とアメリカとの研究体制には格段の差があり、陽子シンクロトロンもなかったので、非常に躊躇したが、自分自身がアメリカの国籍をとるのか、とか色々考え、また西川先生の熱意に感動して、恐れおののきながら東大からのofferをお受けした。1969年12月に着任して、すぐまたUMASSに戻り、そちらでの仕事の片をつけて本格的に東大に来たのは1970年の8月末であった。来て驚いたのは私の居室には電話以外は何もなかったこと、研究室はごみだらけで色々な不用品がはいっていたことである。次に驚いたのが給料だった。当時の換算率で私のアメリカの月給は約72万円、そして私の初任給は8万円程度だったと思う。しかしなんとかなるもので、住む家があったこともあって、家内と2才と5才の子供と4人がどうやら生活出来た。なにしろ日本のことは、特に東大の色々な儀式にはまったく無知な私は“半日本人”で理学部事務の方々や教室の皆さんに大変ご迷惑をかけたようだ。科研費、

概算要求などという言葉も聞いたこともない私にとってはすべてがミステリーであった。ある事務官に“先生はいったいどうゆう経歴の方ですか”と聞かれたこともあった。帰国旅費の計算のために、現在の事務長補佐の川口さんが地球儀を持ってきて、我々の住んでいた町のあるあたりから東京まで紐で直線でつないで距離を計ったりおかしいやら、涙ぐましい努力をしてくださった。海外出張があまりないころ、私はたびたびアメリカに里帰りをして、川口さんの頭痛の種を作ったに違いない。

私の日本語もかなり怪しかったらしく、球面波を円面波といたり、山本の言語録なるものが学生のなかに出回っていた、という伝説もある。講義の板書のほとんどは英語だった。3年生のゼミナールを英語でやったりして、なかなかアメリカとの臍のおが切れなかった。ものの考え方も合理主義、自己主張、個人主義的な色彩が強く、私の給料があまりに低いので、小平学部長の所に談判にいったら、故吉野事務長がびっくりされたそうだが、小平先生は“アメリカ人はみなあんなものだよ”と事務長に言われたと、吉野さんがおしえてくれた。

研究室の新設は、なにしろごみすてから始めたのだから、最初は非常にのろいペースで進んだ。しかし新しい学問であること、研究室の雰囲気も自由で上下関係がほとんどなかったこともあって、大変優秀な大学院生に多く恵まれ、段々活気をおびてきた。泡箱写真の解析装置もすべて自分たちで設計し、ほとんどの物は手作りであった。そして着任後数年経って研究活動が順調に動きだした。着任後2年目ごろに科研費のAに当たり、1千万以上の研究費が12月末に入り、それを翌年の2月末迄に使えといわれ、大変な苦労をしたことは忘れられない。当時の理学部事務の片岡さんの援助がなければ切り抜けられなかったであろう。事情は大分改善されたとはいえ、研究、教育活動を妨げる規則、書類、雑用の多さをなんとか減らせないものだろうか。

1977年に高エネルギー研の12GeVの陽子シンクロトロンが動きだし、1m泡箱を使って実験を始めた。大量の写真を見たり、映っている飛跡の測定のために多くの若い女性のアルバイターが働いていて、なかなか華やかな研究室だった。大学院生の二人はアルバイターと結婚したし、もう一人はアルバイターの友達と結婚した。社交的にも生産性があがってきた。その後泡箱の運転が停止されたこともあって、いわゆるカウンター実験を始めた。またトリスタン実験にも東大グループのメンバーとして参加した。最後の実験は陽子シンクロトロンを使った高エネ研との共同実験で、5年半かかって一昨年の5月にデータ収集を終え、昨年末に2編の論文を発表した。

研究、教育以外に、他の教官から較べればずっと量が少なかったとは思いますが、学内外の色々な委員会の委員をやらされた。これが私の“日本人への再生”に大変役立ったと思う。全学の委員会は、東大に来るまで日本で働いたこともなければ、大学での子弟関係も経験したことのない私にとっては開眼的経験であった。特に委員長をした時は、学部長会議での報告など、やや国会答弁的発言も出来るようになった。そして年月が過ぎていくにつれ、前だったら非常に矛盾を感じたであろうことや、批判的発言をしたであろうことが段々少なくなってきた。また、一見無益有害の会議のメリットも少しは分かるようになった。しかし、最も感受性の高い時代を過ごしたアメリカの影響は骨髓にまでしみこんでいるようで、今だに顰蹙をかうような言動を時々しているようである。“I'm quite comfortable both in Japan and the U. S., but at the same time I'm slightly uncomfortable in both.”というのが私の心境である。

東大は私が一番長く勤めた所で、私を良い意味で（と私はおもっている）“ほとんど日本人”に育ててくれた所でもあるので、深い愛着の念を持って去っていけることを嬉しく思っている。最後に私を東大に呼んでくださった西川先生、泡箱写真の解析のためのアルバイターの費用の一部を負担

して我々の研究活動の向上に寄与して下さった、
当時中間子科学研究施設長、現核研所長の山崎敏
光教授、教室の皆さん、裏方として私を助けてく
ださった事務官の皆さん、そして私に常に希望と

勇気を与えてくれた学生の皆さん、特に研究室の
現役、OB、OGの皆さんに深く感謝の意を表し
たい。